

京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を



株式会社 京都建築事務所
代表取締役社長 細見 建司

〒604-8083

京都市中京区三条通柳馬場東入
中之町 10 番地

TEL:075-211-7277

FAX:075-211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>



医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

総合社会福祉研究所 2025 年度総会のご案内

日頃より総合社会福祉研究所の諸活動にご協力たまわり、感謝申し上げます。2025 年度の総会を、下記の通り開催いたします。今回の総会は、例年のように「社会福祉研究交流集会」に合わせた開催ではなく、別の日程で開催いたします。会員のみなさまには、順次議案書および総会の案内文をお届けいたしますので、ぜひご出席ください。また、ご出席がむずかしい場合は、委任状をご返送くださいますよう、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

日時：2025 年 9 月 13 日（土）10 時～12 時

場所：社会福祉法人大阪福祉事業財団 うえるほうる

（現地とオンラインの併用開催）

※詳細や申込み方法は、別途郵送にてご案内いたします。

現地の声から学ぶ、災害と福祉



第30回社会福祉研究交流集会は、「尊厳のある地域での暮らしを守るために——奥能登の活動に学ぶ」をテーマに、8月30日・31日に石川県七尾市を拠点に開催します。その企画のひとつとして、福祉現場で働く職員によるプロジェクトチームを発足させ、大阪・愛知・埼玉の社会福祉法人から集まった5名の職員が、6月下旬に能登半島地震の被災地を訪問しました。2泊3日の行程で、^{すずし}珠洲市の高齢者福祉施設や輪島市の障害者施設、珠洲市の仮設住宅、^{あなみずまち}穴水町子育て健康課などをたずね、現地の住民や支援者の方々の声に直接ふれる機会をもちました。震災発生から1年半が経過した今もなお、倒壊した家屋や寸断された道路があちこちに残されています。地域の復旧・復興の大幅な遅れに、チームのメンバーは大きな衝撃を受けました。



社会福祉法人長寿会の特別養護老人ホーム第三長寿園は、地震により電気・水道・通信が長期間にわたって停止し、大きな被害を受けました。法人事務局次長の高堂泰孝さん（写真）からは、行政からの支援が遅れるなか、法人が主体となって支援してほしい内容を明確に発信することの重要性を痛感したこと、また、平時から自治体との連携、地域住民と顔の見える関係を築いておくことが、緊急時に信頼と協力を得るために不可欠だと実感した、とのお話をうかがいました。

今年2月には、隣接する仮設住宅の住民から「気軽に集える場所がほしい」との声を受けて、敷地内に交流拠点施設「みつけカフェ」を開設されました。被災者の見守りや相談支援、住民同士の交流の場として活用できるよう、心の安らぎと地域のつながりを育む場となることをめざしておられます。



就労継続支援B型と生活介護の複合型事業所「一互一笑」^{いちごいちえ}もライフラインが途絶し、職員自身も被災しながら、避難所の設置や、地域の高齢者や障害者などの要配慮者の受け入れに尽力しました。避難生活が長期化するなか、現地での生活をつづけることが非常に困難となり、独自に他県への広域避難も実施しました。現在、避難先で新たな生活をはじめた方もいれば、地元に戻られた方もいます。そうした方々にとって、「一互一笑は、『一時的な避難』から『生活再建支援の拠点』へと役割が広がっている」と管理者の藤沢美春さんは語ります。

今、通所再開に向けて準備が進められていますが、写真のように建物の天井からは水が漏れ、エアコンも故障したままの状態、完全な復旧にはまだまだ時間と費用を要します。



仮設住宅では、運動不足や慣れない生活環境からくるストレスや孤独感を抱える方が多く見られます。そうしたなか、石川勤労者医療協会・健康友の会は、地域に根ざした「健康づくり」「コミュニティづくり」にとりくみ、活動を広げています。写真は、同会が仮設住宅で開催した健康教室のようすです。いっぽうで、被災者の医療費免除は6月末で打ち切られました。仮設住宅で暮らすある高齢の方の「これからどう生きていけばいいんやろ。死ぬしかないかね」とのつぶやきは、プロジェクトチームの心に深く残りました。被災者の声が十分に反映されないまま復興政策が進むなか、仮設住宅に入居できたとしても今後の生活の見通しが立たず、多くの方が将来への不安を抱えています。

能登にはうつくしい自然と誇れる文化があり、再建に向かって歩む人々がいます。現地を訪れたからこそ見えた痛みと課題を、決して風化させてはなりません。集会のオープニングで、現地を訪れたプロジェクトメンバーによる報告をおこないます！

(写真・文 黄 驥)

●特集●日韓の若者とともに考える 労働と居住の未来像

日本と韓国の若者の労働と居住の問題	岡部 茜	10
労働法の外で働いているみんなのそばに	キム・ジヒョン	12
個人主義に対抗できる労働運動を	富永 華衣	16
家を所有しなくても安心して住める社会をめざして	キム・カウオン	20
段階的な就労支援と安心できる居場所保障の両輪で	小林 大悟	24
〈トーク〉若者の権利保障を求めて		28

●トピックス●

自然とくらしと地域をまもる農業政策を	宇田 篤弘	32
「恵」問題で果たした労働組合の役割	西田 知也	36
釜ヶ崎から学んで、自分のまちを考えよう		
——第12回釜ヶ崎のまち短期留学		42

●連載●

阪神・淡路大震災発生から30年 第6回	正井 禮子	48
災害時の女性への暴力、人権侵害とたたかって（後編）		
なかまと職員と家族と、ともに築く暮らしの場	辻 英子	52
息子ができるだけ安心して次の住まいへ移れるように		
続・ヘルパー歳時記 「その人らしい暮らし」とは②		56
WORK WORK——わくワク——		
「くらす」と「はたらく」を支える場として		

シャロームみなみ風 60

JOB&ACTION 全国福祉保育労働組合 (54)

「生活保護裁判」にかかわって 62

私の履歴書 社会福祉経営全国会議 (54)

子どもたちを支える保育の「仲間のチカラ」を実感！

阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎 (74)	石口 俊一	64
育つ風景	水野阿修羅	66

保育園のなかで子どもの抛りどころになっている人 清水 玲子 68

映画案内 『碁盤斬り』 吉村 英夫 70

現代の貧困を訪ねて 生田 武志 72

「いのちのとりで裁判」の最高裁判決で原告が勝訴

似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

おにぎり総理じゃ！ ラッキー植松 74

ホームレスから日本を見れば ありむら潜 76

花咲け！ 男やもめ 川口モトコ 77

福祉のひろば

2025年9月号

●表紙の絵●
神門やす子

「逆転しない正義」と 「排除しない街・西成」

NPO 法人日越支援会 副理事長 船岡 敏和

NHKの朝の連続テレビ小説では、『アンパンマン』の作者・やなせたかし夫婦をモデルにしたドラマが世間の好評を得ています。

彼は、自身の悲惨な戦争体験から生涯反戦・平和への願いを胸に、一貫して弱い立場にある人々を励まし、子どもたちを勇気づける物語や歌詞、メッセージを数多く残しています。代表作『アンパンマン』では、仲間とともに勇気をもって困難に立ち向かい、弱い立場の人々を助けるヒーローが活躍する姿をいきいきと描いています。

そこからは、人間愛と助け合いの尊さ、不正や悪に立ち向かう勇気の大切さが自然なかたちで伝わってきます。彼は、こうした思いをさまざまな機会や作品を通じて、子どもたちや社会に向かって変わることなく問いかけ、生涯発信しつづけてきました。

そして、朝ドラでは、いつの間にか組み込まれ、加担してしまった軍国主義教育や、聖戦とされた戦争が、戦後になってそれとは真逆の「日本による侵略戦争」であり、アジアの国々や人々に計り知れない惨禍を残したことに對して自省を表す言葉として、「逆転しない正義」という表現がさまざまな場面で使われています。

いっぽう、世界では「アメリカ・ファースト」のもと、他国を顧みない自国（自分）第一主義が広がり、すべてを弱肉強食や損得勘定の論理に置き換え、主権平等や基本的人権、正義と信義を否定する「専制と偏狭な力の『正義』」が世界を圧迫し、恫喝（どうかつ）しています。それは、多くの人々の夢や希望を断ち切り、分断と排除で社会や人々を引き裂く大きな壁のようにも見えます。

こうした風潮のなか、今回の参議院選挙では、一部の政党が生活に困り、将来への不安や不満を抱える多くの国民に對して、根拠のないデマや虚偽を拡散し、在日外国人へ



ふなおか としかず

コロナ禍の支援活動の経験を経て、大阪市西成区にてベトナム人僧侶の理事長とともにベトナム人をはじめ、すべての外国人と日本人が手を携えて地域社会で安心して暮らせる「ふだん着地域共生」をめざし、2023年2月にNPO法人日越支援会を創設する。また、2019年大阪府を退職後、現在（公財）西成労働福祉センターで在留外国人の雇用・就労支援事業に従事。

の反感や排斥感情を煽り、これを選挙に利用するという、排外主義の動きが活発となっています。

そのようななか、七月中旬に総合社会福祉研究所の主催で「釜ヶ崎の排除と包摂」をテーマにおこなわれた、地元の水野阿修羅さんの案内による「釜ヶ崎のまち歩き」に参加させていただきました。困難を抱える人々を排除することなく受け入れてきた地域の歴史や、西成発祥の教育や福祉を支援するしくみとなったさまざまな拠点を二時間近く訪ね歩き、たいへん貴重な一日となりました。

もちろん、西成にも「排除と包摂」は常に隣り合わせで存在しています。けれども、この地域では社会から排除されそうな弱い立場の人々を見捨てることなく、社会や時代の変化をも拒むのではなく受け入れ、人情味ゆたかな世話焼き気質と進取の気風をもつて、激変する社会・経済環境を乗り越えてきました。

何より大切なのは、そうした「排除しない街」として受け継がれてきた「逆転しない歴史と伝統」であり、それを支える西成の地域住民が主体的に参加する未来図に、希望の光が見えた一日でもありました。

法律や制度はトップダウンでつくられるものですが、「共生」は顔の見える関係づくりからしか構築できません。微力ではありますが、日本と地域の未来を担う外国にルーツをもつ子どもたちと地域の子どもたちがしっかり手を取りあい、一緒に地域の未来図を描き、ゆたかな地域を創造する架け橋となるよう努力したいと思います。

「二寸先は、光だ！（やなせ たかし）。

日韓の若者とともに考える 労働と居住の未来像

本誌でもたびたび、若者・青年世代の労働や住まいの問題について考えてきました。二〇二四年五月号の特集では、「若者の拠りどころを社会に」をテーマに、若者が安定した仕事や住まいを得られない背景と、その問題にとりくむさまざまな活動について紹介しました。また、二〇二四年一二月号では、とくにコロナ禍以降急速に拡大しているウーバーイーツ配達員などの「フリーランス」の実態と問題についても考えてきました。

非正規雇用の増大と、雇用契約すらないフリーランスなどの急増、そして、そうした働き方における労働条件や労働環境が劣悪で、権利が守られていない状況は、おとなりの韓国も同様の問題を抱えています。また、若者の住まいの確保についても、日本と韓国の住宅施策による問題のちがいはありますが、住まいの確保が「自己責任」であり、経済的な基盤の弱い若者がとくに不利な状況に置かれているという実態は共通しています。

そこで、総合社会福祉研究所では七月二日、若者の労働と住まいの問題にかかわって活動している日本と韓国の団体に登壇いただき、「日韓の若者とともに考える労働と居住の未来像」をテーマに、オンラインでシンポジウムを開催しました。労働問題については、日本からは首都圏青年ユニオン、韓国からは青

年ユニオンに、そして住まいの問題については、日本からは釜ヶ崎支援機構、韓国からはナメクジユニオンにご協力をいただき、司会は大谷大学の岡部茜さんをお願いをしました。今号の特集では、そのシンポジウムの一部を紹介します。

青年世代というのはそもそも、子どもから大人への移行期であり、さまざまな不安定な要素をはらんでいます。子どもとして保護される対象から外れ、学生から労働市場へと参入していくことになります。そうした移行期を支えてきたのが、家族の存在や安定した労働市場でした。しかし、日本においても韓国においても、貧困と格差の拡大や労働の不安定化がすすむなか、頼れる家族がいなかったり、権利が守られていない労働環境におかれている若者がとても増えています。

また、韓国青年ユニオンのキムさんが指摘してくださっているように、青年世代は、社会の変化や技術の発展のなかでめまぐるしく変化する労働形態や労働市場の変化を、もつともはやく経験する世代です。そうした変化による権利侵害をゆるさず、自己責任に帰せず、対話による連帯を広げていくことが、「分断」がすすむいまの社会のあり方に対抗していく希望になるはずだと、首都圏青年ユニオンの富永さんは話してくださいました。

「労働」と「居住」は一見別物のように見えますが、労働も居住も、生きるために不可欠な守られるべき権利です。釜ヶ崎支援機構の実践からは、その両輪での支援の重要性がとてもよくわかりますし、韓国でも、「住まいは人権」を掲げた運動にとりこんでいます。

韓国の団体からは、何度も「連帯」という言葉が語られました。あたらしい時代の「連帯」をどんなかたちで、どう広げていくのか、若者が置かれているきびしい実態が語られながらも、共通した可能性や希望も見えたシンポジウムになりました。

(編集主任 申佳弥)